

書き続けることが 私の人生

フリーライター・エディター・作家

石川 憲二さん ISHIKAWA KENJI

東京都出身。桐朋高等学校卒業後、東京理科大学理学部第一部化学科に入学。1983年卒業。編集プロダクション、雑誌記者を経て、フリーランスのライターおよび編集者に。書籍や雑誌記事の制作および小説の執筆を行ってきたほか、約40年にわたり企業や研究機関などを取材し、技術やビジネスに関する解説記事を書き続けている。



多ジャンル、 多作の3倍速ライター

40年間で、取材をした人は約1万5000人。自分の名前で出版した本数は約30冊。編集やゴーストライターとして参画した本は50冊超。そのほか、数えきれないほどの記事を雑誌やウェブサイト上发表してきた。大企業の会社案内や採用情報誌も数多く手がけ、経営者や技術者等の取材多数。

依頼があればどんな本でも書く。『エコカーの技術と未来 電気自動車・ハイブリッドカー・新燃料車』（オーム社）などの科学・技術本、『大人が読みたいエジソンの話 発明王にはネタ本があった!』（日刊工業新聞社）などの伝記ものや『砂漠の国に砂を売れ ありふれたものが商品になる大量資源ビジネス』（角川書店／KADOKAWA）などビジネス本も。子ども向けでは『マンガでわかる量子力学』（オーム社）をはじめとした「マンガでわかる」シリーズがある。「これだけ幅広い分野をカバーしているライターは他にいないでしょうね」。

自称、「何でも屋」。書くスピードも速い。「取材やリサーチに1ヵ月、執筆に1ヵ月、合計2ヵ月あれば1冊の本が書ける」という。



- ①『エコカーの技術と未来 電気自動車・ハイブリッドカー・新燃料車』（オーム社）
②『大人が読みたいエジソンの話 発明王にはネタ本があった!』（日刊工業新聞社）
様々な新事実も紹介 ③『砂漠の国に砂を売れ ありふれたものが商品になる大量資源ビジネス』（角川書店／KADOKAWA）



- ④『マンガでわかる量子力学』（オーム社）。原作を担当。当時、理科大学理学部名誉教授だった川端潔先生に監修をしていただいた⑤『秘境駅へ行こう!』（小学館）は編集者としてもっとも力を入れた作品。ベストセラーとなり続編も出た ⑥『未来マシン』はどこまで実現したか』（オーム社）数多くてがけた科学技術解説書シリーズの中でもお気に入りの本

ついたあだ名が「3倍速ライター」。

その人の名は、石川憲二さん。1983年に東京理科大学理学部を卒業。その後、週刊誌の記者等を経て、現在に至る。

理科大でモラトリウムを満喫

子どもの頃、勉強はとにかく嫌いだった。夏休みの宿題も、最終日にあわててやるタイプ。早くから原子や分子の世界に興味を持ち、物理学者になりたいと思っていた。そのまま理系の道に進むかと思いきや、高校に入ると迷いが生じ始める。「文学や美術にも興味があって、そっちの道もあるかなと。方向性が定まらないから勉強にも身が入らない。かといって、大学に行かないという選択肢はなかった。とりあえず緊急避難的に理科大に進みました。こんなことを言ったら大学から叱られるかもしれないけれど、理科大は理系の大学にしては自由な時間が多く、僕のように勉強をしない人間でも卒業できたのだから、モラトリウムには最適の環境だと思います」

ただし、1年目は関門科目をパスできず、留年をしている。

理科大に来て驚いたのは、キャンパスがないこと。「広い芝生のキャンパスで白いギターをかき鳴らすのが大学生活だと思っていたのに、初っ端から夢が破れました。でも、都心にあって便利で、国立近代美術館や科学技術館も徒歩圏内。授業をさぼって美術館や博物館巡りばかりしていましたね」

就職に苦戦した後、天職に出会う

留年に凝りて、2年目からは単位の取りやすい科目ばかり選択した。化学科では卒業研究が必須ではなかったもので、授業単位だけで卒業する道を目指す。「これぞ最短コース、ラッキー！」と思ったが、就活時にはそれがネックとなった。「研究室に入ってちゃんと卒業研究をした人は教授の推薦で就職ができる。しかし、無所属の僕は、どこにも推薦してもらうことができなかったのです」。自由応募ができる会社は文系の学生が優先で、理系出身者は門前払いされることもあったという。就職が決まらず、困り果てて訪れた大学の就職課で、近所の編集プロダクションの求人票が目にとまった。「軽い気持ちで面接に出かけたら、理系の学生がめずらしかったのか即採用。大手マスコミに入れなかった東大卒や早稲田卒の社員がごろごろい

るようなプロダクションで。朝から晩まで長時間労働で厳しい職場でしたが、おかげで力がついた。今の自分なら、出版社でも通用するかもしれない。潮時だと思って2年で退職しました」

同じ頃、テレビ番組の制作会社に勤める知人から企画を考えてほしいと声がかかる。「江戸時代に日本の醤油がフランスにたくさん輸出され、隠し味として重宝されていただけでなく、美食家として知られるルイ14世にも愛されていた」という史実をもとに作った企画が採用された。実はこの話は、大学時代にレストランでアルバイトをしていたのをきっかけに、料理研究に没頭して仕入れたネタだった。「厨房でバイトをしていて、料理人になるのもいいかもと思うほどハマっていました。ただ、同じメニューを作り続けるのが嫌で料理人の選択肢は消えましたが、料理にはずっと興味があり、主婦雑誌で創作メニューの連載までしていたことがあるのですから、縁は大事ですね」

幸い番組は好評を博し、知人はディレクターからプロデューサーに昇格。その縁で、石川さんは大手出版社の編集者に紹介され、発行部数ナンバーワンの週刊誌の記者となる。

「やってみるとこれが面白くて。まさに天職だと思いますね」

スクープで一躍注目を浴びる

記者になりたてのころ、プロ野球の有名投手の単独取材に成功し、一躍、「やり手の記者がいる」と評判になった。この投手はドラフト一位で読売ジャイアンツに入団したが、後に、トレード騒動で一時雲隠れしていた。そのさなか、自宅に押しかけた取材陣に、



雑誌記者の
仕事は
天職だった

週刊誌記者をしていたころ。芸能、スポーツ、文化、社会などさまざまなジャンルを担当。

たまたま帰宅した彼は「明日ならみんなの取材を受ける」と約束する。しかし、共同取材では新聞社が先に報道してしまう。週刊誌は速報性の面で圧倒的に不利だった。「それでは記事にならない。車を出してやるから単独取材をしてこい」と上司に命じられ、重い足取りで取材先に向かった。しかし、そこで石川さんがとった行動は…。

「共同取材が終わった直後、とっさにその選手の腕をつかんで、車に押し込んでいました」。集まった他社の記者たちの怒号が飛び交う中、車はするすると走り出す。みんながあきらめて早々に引き上げるなか、石川さんは1時間の単独取材に成功。圧勝だった。

そのスクープ以来、話題の事件なども担当させてもらえるように。宮崎勤の連続少女誘拐殺人事件では、石川さんだけが被害者の遺族に取材することができた。取材嫌いの元野球監督に、「石川となら話したい」と言われたこともある。記者にとって一番重要なのは、取材相手から本音を引き出す力。石川さんはその力が抜群だった。秘訣はと聞くと、「特別なことはしていない。何度も訪ねたり、電話をしたり、ただしつこく食い下がるだけ」。人から煙たがられることはなかったのか。「しつこくしても嫌がられることはなかったね。懷に飛び込むのはうまかったのかもしれない」

スクープを取って注目されたいと願わない記者はいないだろう。しかし、石川さんは、超えてはいけな一線があると話す。「この記事が世に出たら、反論できないような弱い人が不幸になる、そう思ったら、絶対にその記事は出さない。自分の書いたものが社会にどんな影響を与えるかは、常に考えなければいけない」

ただし、それを実行するには「仕事で成果をあげている」という実績が必要だ。

「そのためにも日々の努力は欠かせない。力をつける方法はどんな世界でも同じでしょう」

著者としての地位を築くまで

「自分の原稿の単語一つとっても、なぜそれを選んだか、全部理由が言える」というほど表現にこだわる石川さんだが、「最初はろくに文章が書けなかった」と振り返る。上手な人の記事を見ては、どうやったらうまく書けるか研究した。20代の終わりには、「石川に頼めば間違いない」と信頼されるまでになり、いろいろな人に紹介されて仕事広がっていった。週刊誌のほかに、会社案内や採用情報誌の仕事を数多く手掛けるようになったのもこの頃で、企業の経営者や技術者への取材が増えた。

「技術者は口下手な人が多い。そういうときは同じ理科系の出身という共通点が役に立った。この人には気が通じるとわかると、心を開いてどんどん話してくれましたね」

この時に培った人脈や、難しい技術の話を誰にでもわかりやすく書く経験は、後に多くの科学本を執筆する土台となった。

30代になると単行本の仕事が増えた。企画・編集を担当した『秘境駅へ行こう！』（小学館）はベストセラーになり、その後の「秘境ブーム」の先駆けとなった。この本は、石川さんがたまたま見つけた一般人のブログを面白いと思って本にまとめたもの。ブログから本を作るという手法は今ではめずらしくないが、その先鞭をつけたのは石川さんだ。「まだ世の中にはないものをいち早く見つけるセンスはあったかもしれません」

30代から40代の20年間で約50冊の本を出したが、これらの本は、編集者やゴーストライターとして関わったもので、自分が著者として前面に出る本ではなかった。

海外には
プライベートでも
よく出掛けた

取材でロンドンへ。
1泊2日という強行軍。
人生でいちばん髪が長い時期でもあった。

書きたいことは
まだまだ
たくさんある



加工機械メーカーへの取材の合間、しばしリラックス。野呂英成氏撮影



(上) 出張中、編集者と。フリーランスはいろいろな人と仕事をするので、こうやって親睦を深めることが、後の仕事にもつながる (下) プラントエンジニアリング会社で取材中のプライベートショット

50代にさしかかり、自分の名前で本を書かなければだめだ、と思い立つ。2010年に『宇宙エレベーター 一宇宙旅行を可能にする新技術―』を皮切りに、『エコカーの技術と未来 一電気自動車・ハイブリッドカー・新燃料車―』、『自然エネルギーの可能性と限界 一風力・太陽光発電の実力と現実解―』(以上、オーム社)を刊行。その後も年3～4冊のペースで本を書き続けた。驚愕の創作意欲だ。

「ひとたび自分の名前で本を出すと、編集者やゴーストライターではなく、著者として扱ってもらえる。付き合いのある出版社以外からも執筆依頼が来るようになりました」

出版不況と言われて久しいが、40年間、仕事が途切れることはなかった。「運がよかったのかもしれないけど、何もしないで待っていたことはない。結構じたばたしましたね。じっとしていても、自分から行動しなければ誰も見つけてくれませんから」

世の中の人知らないことを わかりやすく伝えたい

「20代、30代はよく書けましたと言われたい、40代ではおもしろかったと言われたい。50代では感動したと言われたい」。それが自分なりの目標だったと石川さん。60代の今は…。「自分の書きたいことを書

きたいですね」

書きたいことはいくらでもある。「一番やりたいのは、世の中の人知らないこと、誤解していることを、本当はこうだよとわかりやすく伝えること。それが物を書く人の使命だと思います」

趣味も幅広い。旅、料理、アート、カメラ、アイドル…。中でも旅は好きだという。大学時代は、ヨーロッパ、アメリカ、メキシコなどを旅した。社会人になってからも暇さえあれば旅に出る。「僕の旅の仕方は普通の人とは違っていて同じところに何回も行く。以前と何が変わったか、あるいは変わらなかったかを確認するのが面白い」。一カ所に、飽きるくらい何日も滞在するのも石川さん流。「スーパーで買い物をしたり、ローカルの小さな博物館に行ったり。観光地を巡る旅では見過ごしてしまうような小さな発見があるのが楽しい」

旅で得た情報や経験はいつか書く本のヒントになる。「何でも現地に行ってこの目で見たくなる。人生すべてがネタですね」。

飽くなき好奇心が石川さんの原動力。「野望なんてなにもない」と言う石川さんだが、その言葉の裏には別の真実があるような気がしてならない。それを聞き出すには、石川さんから「懷に飛び込む術」を伝授していただく必要がありそうだ。

取材を終えて

2015年からこのコーナーを担当させていただき、研究者、建築家、起業家、弁護士、歌手、画家など、さまざまな職種の卒業生を取材してきた。今回は初の文筆家。同業者だが、石川さんの広範な活躍と多作ぶりには足元にも及ばない。次から次へと書きたいことが思い浮かぶという超人的なエネルギーに脱帽。私も負けずにがんばります！

(フリーライター／石井栄子)